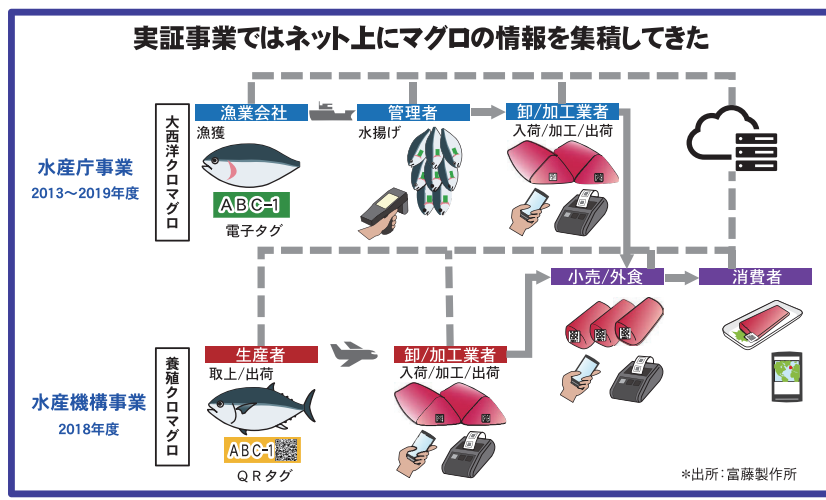




ゴム・樹脂シーリング材製造の富藤製作所(東京都荒川区)は電子タグ技術によって、水産流通の透明化に取り組み、魚の取引データを管理するアプリの開発も進めており、漁獲から陸揚げ、流通加工、販売までの各段階でデータを簡単な力で積み上げ、トレーサビリティ(トレサ)商品の取引経路を追跡できることを確保する。同社は大西和信第2事業部長に取り組みを聞いた。

【①スマート化で、水産はどう良くなるか】

少ないコストで透明化を進められることが大きい。魚を誰がどこで獲り



電子タグで流通透明化

富藤製作所 資源管理、食品安全に寄与

封筒型の電子タグ

データがシステム上に残っていき、消費者まで届く(図参照)。

当社は2013年度から水産庁と連携し大西洋クロマグロの、18年度には水産研究・教育機構との連携で国産養殖クロマグロの電子タグシステムを実証してきた。大西洋では漁業管理を推進。中国では日本産クロマグロの輸出拡大に向け、商材の安全性を消費者まで伝える試みをした。

【②スマート水産に、自社の技術はどう貢献できるか】

魚体に付ける電子タグの製造や、魚体の取引データを管理するアプリの開発を行っている。インターネット上に「どの業者が、いつ、何個に魚を切り分け、誰に売ったのか」を記録することで、質の高いトレサを担保するのだ。

漁業者は魚体にタグを付け、漁獲日時や漁場位置などの日報をネット上のシステムに送る。魚を買い取った流通加工業者は、タグの読み取り機を通して日報の情報を把握しつつ、自らが魚をいつどこで加工したか、1尾の魚をさばいて何切れに分けたのかなどデータを入力。機器はデータを同システムに送るとともにQRコードを発行するの

【③競合他社と比べた強みは】

当社は1926年の創業以来、ゴム・樹脂シーリング材を製造している。超低温の冷凍庫内でも凍らない材質の樹脂で、タグを製造できる知見も持つ。超低温対応のタグの技術は、私たちの強みと

(東京支社・太田毅人、週一回掲載)



場を決め、スムーズな販売につながる。

欧米では、資源管理とトレサのしっかりした水産物に消費者も相応の対価を払う流れになっていく。こうした志向の消費

は漁業者の企業秘密という側面も大きく、どの情報をどこまで公表するか議論が必要だが、ある程度の漁獲情報を漁船から市場に速報すれば、船上の交渉で魚価や陸揚げ

例えば電子機器の普及で、漁船はどの魚種がいつどこで何トン獲れたのかという日報を手軽に入力・送信が可能。こうした詳細な情報は、トレサによって販売先の人によって確認できるようになる。

漁業現場を見ていても、20〜30代の漁業者は電子機器を使っている。漁場や魚価など